The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ウランバートルの今を生きるシャーマンたち（上）：活動形態の変化と潜在的可能性について
Author(s)	藤井, 麻世
Citation	モンゴル研究. 2008, 25, p. 2-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102348
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《論　文》

ウランバートルの今を生きるシャーマンたち（上）

－活動形態の変化と潜在的可能性について－

藤　井　麻　世

はじめに

1．テーマ選択の動機

筆者は特定の宗教を信仰していないが、自然そのものを神として敬意を払う、自然信仰の考え方に非常に共感している。以前、モンゴルについてのドキュメンタリー番組を見た際、自然信仰が当たり前の習慣として生活に溶け込んでいることに興味を持った。同時に自然信仰と関わりが深い「シャーマン」という存在に対しても、興味や一種の憧れを抱くようになった。

モンゴルのシャーマンについては、民族学的な立場から多くの研究がなされている。しかし、当初筆者が日本で入手した文献や資料は、古い時代のシャーマンか、地方で活動するシャーマンの衣装や世界観について書かれたものばかりであった。そのため、シャーマンは社会主義時代に弾圧され、現在では地方に少人数しかいないと認識していた。

だが、2003年に初めてモンゴルへ旅行した際、ウランバートルでシャーマンが増えていることを知る。自然と関係が深いはずのシャーマンがなぜ都市部に増えているのか、どのような人々に必要とされ、活動しているのか、といった疑問が沸き、彼らの実態と社会的な背景を知りたいと思った。

シャーマンに行ったインタビュー調査や、一般の人と話をする中で、シャーマンに対するモンゴル人の印象は良くないと感じた。シャーマンは呪いをかける恐ろしい人々、あるいは詐欺師のようなものだと考える人も多い。実際に調査するまでは、筆者もウランバートルのシャーマンを疑いの目で見ていた。自然の多い田舎で、昔ながらの活動をしているのが本物のシャーマンであるため、都会のシャーマンは偽者ではないかという気持ちがあったからだ。お酒で身を持ち崩してしまったシャーマン、代金を不当に請求するシャーマンと出会ったこともある。

だが調査を進めていくにつれて、活動場所が都市部であっても、自然祭祀儀礼を行う時には地方へ行くなど、核の部分は変化していないことがわかった。また筆者が調査を行った大抵のシャーマンは、ごく普通の親切な人たちであり、彼らを頼り、救われたと感じる相談者も確かに存在している。シャーマンの実態を出来るだけ詳しく紹介し、シャーマンの悪いイメージを覆したい、シャーマンの面白さを知ってもらいたいという気持ちが、このテーマを選択した動機である。

2．本論文の目的

（1）社会の変化等の影響により、シャーマンの活動形態がどのように変化したかを分析すること。また、シャーマンの役割について分析すること。

（2）グラウンデッド・セオリー法[1)]により「シャーマンは、自然や故郷とのつながりといったものと切り離され、満たされない思いを抱える人々を癒す可能性がある。」

という仮説理論を提示すること。

３．調査の方法

（１）聞き取り調査

筆者は2005年5月4日から2005年12月4日までの間、モンゴル国ウランバートル市に留学していた。2005年8月12日から24日にかけてフブスグル県へ行き、ツァータンのシャーマン３人と、ダルハドのシャーマン１人に聞き取り調査を行った。

またウランバートルにあるシャーマンのセンターを訪れ、3人のシャーマンに聞き取り調査を行った。11月にはブリヤートのシャーマン、ガルバドラフ・ザイランと知り合い、帰国後の2005年12月4日以降もＥ-メールと電話で連絡を取り続ける。

そして、2006年7月26日～2006年9月28日の期間、筆者は再びモンゴルを訪れた。この間、ガルバドラフ・ザイランと行動を共にし、彼に対するインタビューや、新しいシャーマンのための儀式に参加する、定例の儀式に参加し相談者から聞き取り調査を行う、といったフィールドワークを行った。また彼と共に５か所のシャーマンのセンターを訪れ、５人のシャーマンに聞き取り調査を行った。

これらの調査結果をまとめ、資料１～５を作成した。資料１では筆者が出会ったシャーマンの衣装や道具についてまとめた。資料２はガルバドラフ・ザイランのライフヒストリーである。資料３はガルバドラフ・ザイランを訪れる相談者について、資料４ではウランバートルでセンターに所属し活動するシャーマンについて、そして資料５では、ガルバドラフ・ザイランたちが行った儀式の様子についてそれぞれまとめた。

（２）文献調査

モンゴル語文献は、ウランバートル市内の書店、古本市で購入したほか、東京外国語大学所属の渡辺隼人さんが所蔵する文献をコピーさせて頂いた。日本語文献は、大阪外国語大学図書館、和歌山市民図書館など国内の図書館から入手した。

４．本論文の展開について

第１章では、シャーマンの定義、そして先行研究や調査をもとにモンゴルのシャーマンの概要を記述する。第２章では、シャーマンと相談者の社会的背景である、ウランバートルの現状や問題点について述べる。そして第３章では調査結果をもとに、ガルバドラフ・ザイラン、彼を訪れる相談者、ウランバートルで組織に所属し活動するシャーマンたちの分析を行う。第４章では、第３章の分析を踏まえ、シャーマンの活動形態の変化と役割についてまとめる。また、筆者の体験から上述の仮説理論を提示するという展開である。

Ⅰ　シャーマン、シャーマニズム概要

１．シャーマン、シャーマニズムとは何か

（１）本論文におけるシャーマンの定義と基本用語の説明

シャーマンの定義については論争がある。その論争について、桜井徳太郎氏の論文「シャーマニズム研究の諸問題－トランスと入巫のパターン－」[2)] pp.17-24の内容をまとめると、次のようになる。

まず、トランス状態に入った後、自らの意識によって神霊と交渉する「脱魂」を行う者がシャーマンであるという説がある。そしてもう一つ、神霊を自らの体に憑依させる「憑霊」を行う者がシャーマンであるという説がある。だが近年では、トランス状態を自らのコントロール下に置くことができるという点が重要であり、脱魂型、憑霊型のどちらもシャーマンであるという考え方も優勢になってきている。

古い時代のモンゴル、シベリアのシャーマンについての記述を読むと、脱魂型であるということが目につく。だが、筆者が調査したシャーマンた

ちは、ほとんどが憑霊型であった。本論文では、脱魂型と憑霊型のどちらもシャーマンであるという考えに従い、シャーマンを「意図的に自らをトランス状態に導くことができ、それによって神霊と関係をもって儀礼を行う、あるいは人の相談に乗るといった活動を行う宗教的職能者」と定義する。シャーマニズムとは、シャーマンを中心とした宗教的形態のことである。モンゴルでは男性シャーマンをザイラン、女性シャーマンをオッドガンと呼ぶ。性別が限定されることはない。

もう一つ、モンゴルのシャーマニズムを論ずる上で、オンゴッドという重要な言葉がある。これは精霊という意味だが、この言葉の中には先祖のシャーマンのオンゴッド、動物のオンゴッドなど、さまざまな霊的存在が含まれている。共通するのは、シャーマンを守護し助ける者であることだ。

また、モンゴルでは、自然神が山、土地、川、湖、火、木などに宿ると考えられている。そして彼らは様々な姿で捉えられている。例えば、ヨーラー・オッドガン[3)]は、フブスグル湖には蛇、熊などの動物の姿をした神が宿っていると説明した。一方ガルバドラフ・ザイランによると、土地神や水神などの自然神は人間の姿をしている。だが、場所によっては動物の姿をした神が宿ることもあるそうだ。

オンゴッドは基本的にシャーマンよりも上の存在である。だが、水や土地、山などに宿る自然神は、オンゴッドよりも更に上の存在である。

（2）「巫病」について

シャーマンになる前によく見られる「巫病」と呼ばれる症状がある。これは、シャーマンになるべき人が、それに気が付いていないとき、もしくは拒んでいる時に現れる。

ガルバドラフ・ザイランによると、モンゴルの場合よくみられるのが意識を失う、ひきつけを起こすなどの症状である。他にも凶暴になる、夢遊病のようになって歩き回るなど、様々なケースがある。また、生活や仕事が上手く行かなくなるということもあげられる[4)]。シャーマンのもとを訪れ、自分がシャーマンにならなければいけないということを知り、その運命を受け入れてからは症状が治まる。その後、同じ民族のシャーマンに師事し、太鼓の叩き方や歌を学ぶのが一般的だ。

2．モンゴル国のシャーマン、シャーマニズムについて

（1）シャーマニズムの歴史概要

Ч.Далай(1959),"Монголын бөөгийн мөргөлийн товч түүх",pp.18-29 の内容を参考に、16世紀までのモンゴル国におけるシャーマニズムの歴史を簡単にまとめると、以下のようになる。

シャーマニズムの歴史は古い。古代から、モンゴル周辺の遊牧民族の間でシャーマニズムが信仰されていた。匈奴の時代にも、シャーマンが数多く存在し、他の部族と戦闘を行う際に参謀として活躍していた。鮮卑族、ウイグル族や、満州族も古くからシャーマンを信仰していた。８、９世紀までシャーマンはどの民族にも存在し、部族の指導者となる場合もあった。

モンゴルにいたほとんどの民族は、12世紀までシャーマニズムを信仰していたと思われる。だが、この期間に関してはあまり資料がない。

1206年、チンギス・ハーンがモンゴル国を統一し、シャーマニズムが国教になった。シャーマニズムの形が整ったのも、この時期である。シャーマンは隆盛を極め、王や貴族の政策にまで影響を及ぼした。13世紀初頭まで、他の宗教はほとんど広まっていなかった。

1268年、フビライ・ハーンが元を建国した。首都が現在の北京に移り、赤帽派のチベット仏教が国教になった。そのため大規模な自然信仰儀礼をラマ僧が行うこともあった。そして、シャーマンの政治的な影響力は随分減った。だが、一般的

な自然祭祀儀礼はシャーマンが行っており、葬儀もシャーマニズムの形式で行われていたため、民衆の間では変わらず信仰されていた。そして、首都がモンゴルへ戻り、赤帽派のチベット仏教が影響力を失った時、再びシャーマニズムが復興した。1368年から1576年までの間、シャーマニズムはモンゴルの主要な宗教であった。

ところが、16世紀の清朝時代になると、黄帽派のチベット仏教が主な宗教となり、シャーマンとラマ僧の間には激しい争いが起こった。赤帽派と違い、黄帽派のチベット仏教は王や貴族に保護され多くの寺が建てられたため、民衆の間にも広まっていった。そして、シャーマニズムは衰退していった。

社会主義時代になると、1924年成立の革命政府が反宗教政策を実施する。ラマ僧もシャーマンも弾圧の対象になった。社会主義時代に、巫病の症状が現れた人からお話を伺ったが、やはりシャーマンであることを公には出来なかったそうだ。師匠のシャーマンが逮捕されたまま帰ってこなかったという証言もある[5)]。インタビューでお話を伺ったシャーマンの中にも、社会主義時代には秘密裏に家で儀式を行っていたというシャーマンがいた。また多くのシャーマンが粛清されたことは、完全な形のシャーマニズムの伝統継承に影響を与えた。

1990年に民主化が起こり、1992年2月の新憲法では信教の自由が保障されたため、シャーマニズムやチベット仏教が復活した。現在、ウランバートルで活動するシャーマンが増加している。

（2）主な民族

ゴロムトセンター[6)]の代表であり、シャーマンの研究家であるスフバット氏によると、現在モンゴル国で活躍するシャーマンは、ダルハド、ハルハ、ブリヤート、ツァータン（トゥヴァ）、オリヤンハイが主な民族であるそうだ。ただ、中には民族というカテゴリーでくくってよいのか判別が難しい場合もある。

モンゴルで一番多い民族は、ハルハである。スフバット氏によると、16世紀に最も目立つハルハのシャーマンが徹底的に弾圧された。そのためハルハのシャーマンに関しては資料が少なく、研究が進んでいないそうである。

現在、一般的にシャーマンが多いとされているのが、モンゴル国の北西部に位置するフブスグル県である。ロシアとの国境近くのタイガ地帯にトナカイを飼って暮らすツァータン（トゥヴァ）、ダルハド、オリヤンハイのシャーマンが有名だ。この地域は土地の力が強いため、シャーマンが弾圧された時代でも、貴族たちがシャーマンを保護したのだという話を、留学時に通っていた学校の先生から聞いた。この話の真偽は不明だが、2005年の夏フブスグル県を旅行した時に、自然環境の厳しさを実感した。自然と折り合いをつけていかなくてはならない環境のため、自然信仰やシャーマニズムが他の地域に比べ、根強く信仰されているのではないかと思う。またこれはブリヤートにも言えることだが、首都から遠く離れた地方で活動していたため、古い時代のシャーマン弾圧政策や、社会主義時代の反宗教政策が行き届かなかったのではないだろうか。

ブリヤートは、もともとロシアのバイカル湖周辺に暮らしていた民族である。シャーマニズムに、ラマ教（チベット仏教）が融合しているという特徴がある。ロシアなど、外国でも多くの研究がなされている。

大体このように分けられるが、互いの特徴が交じり合っている場合もある。複数の異なる民族のシャーマンに弟子入りするという例、ブリヤートのシャーマンに師事したハルハのシャーマンが、数珠を身につけているなどの例があった。これは社会主義時代にシャーマンの数が減ったため、それぞれの正確な伝統の継承が難しくなったこと、現在さまざまな民族のシャーマンがウランバート

ルに存在し、交流が進んでいることが原因だと思われる。

（3）衣装や道具が持つ意味

シャーマンが身につける物や道具は、悪い影響から身を守る鎧であり、霊的存在と交渉するための道具であり、それ自体が信仰の対象である。身につけていないときは、サヒオスと呼ばれるお守りになる。

筆者が調査したシャーマンの衣装や帽子などについて、資料1にまとめた。また、スフバット氏の著書 "Монгол нүүдэлчин ардын шашин шүтлэгийн зан үйл" の pp.141 ～ 182 に、シャーマンの衣装や道具が図や写真入りで詳しく紹介されている。

（4）自然祭祀儀礼と儀式

自然神を讃える代表的な儀礼には、オボー、山、土地の神に対して行うものが挙げられる。また、火、湖、川、シャーマンの木と呼ばれる神木に対してなど、様々な場所で様々な儀礼が行われる。これらの自然祭祀儀礼をタヒルガと呼ぶ。雨乞いの儀礼を行うこともある。また、旧正月の儀礼や、季節的な儀礼を行うシャーマンもいる。

ブリヤートのシャーマンは、チャナル[7]という儀式を行う。これは、シャーマンの位をあげ、より強い力を得るための儀式である。1年に1度、合計13回、13年にわたって行われる。時期は、カッコウが鳴き始める5月22日以降だ。

また、ブリヤートのシャーマンにはユスンテイ／ユスニイウドゥルと呼ばれる儀式を行う者がいる。これは、旧暦で9のつく日、つまり9日、19日、29日に先祖のシャーマンのオンゴッドと交流する儀式である。

（5）オンゴッドや自然神との関わり方について

オンゴッドや、自然神との関わり方は、民族やシャーマン個人によって異なる。ただ、筆者が出会ったシャーマンの例からいうと、ブリヤートのシャーマンは先祖のシャーマンのオンゴッドと関係が深い。土地神や水の神といった自然神とも、オンゴッドを通じて関わりをもつ。一方、ハルハのビャンバドルジ・ザイランのように、祖先のオンゴッドとはあまり関係を持たず直接自然神と関わるシャーマンもいる。

（6）通訳者

シャーマンがトランス状態になると、方言で話しだすことや、舌がもつれて言葉が聞き取れなくなることがある。そのため必ず通訳が必要だ。通訳者は、弟子のシャーマンの場合もあれば、家族の場合もある。相談者に対しどのようなオンゴッドが来て、何を話したのかを伝える重要な役割を持つ。

II　ウランバートルの現状

1．ウランバートルでは何が起こっているのか？

（1）社会システムの変化

モンゴル国では、1990年以降に社会主義体制から議会制民主主義・市場経済化への体制移行が進み、1992年には新憲法が制定された。しかし、これらの急激な変化が社会と経済の混乱を招き、貧困問題など多くの社会問題を引き起こした[8]。

その一方、信教の自由、出版、思想の自由が認められるようになった。日本を含む西側諸国との経済面での連携が強まり、観光やビジネスなどを目的とした外国人の出入りも増えた。

（2）都市化が引き起こした問題と情報化

『大辞林』によると、都市化とは「産業化の進展、高速交通網の発達、情報化などに伴う人口の都市への集中、都市的生活様式の形成とその農村部への浸透過程をいう語」である。

モンゴル国の場合は農村ではないが、近年学校に行くため、病院で治療を受けるため、遊牧に見切りをつけ都会で仕事に就くため、といった理由

で地方からウランバートルに移住する人が増えている。

モンゴル国統計局[9]によると、2002年のモンゴル国人口は約247万人で、ウランバートルの人口は約84万人である。ところが、2005年には人口が約256万人に対し、ウランバートルの人口は約96万人になっている。つまり、2002年には全体の34.1％だった首都の人口比率は年を追うごとに上昇し、2005年には37.6％になっているのだ。首都近郊ではゲル地区が急速に広がっている。道路、水道、電気などのインフラが整っていない所もある。またゴミ問題、大気汚染、貧困問題などさまざまな問題が起こっている。

一方、情報化も進んでいる。ここで述べる情報化とは、インターネット、ＴＶ、出版物、携帯電話などの通信手段が普及し、それによって情報伝達の高速化、広域化が起こることである。モンゴル国では地方都市にもインターネットの敷設が進み、ウランバートルには数多くのインターネットカフェがある。携帯電話も普及しているし、さまざまな種類の広告、新聞、書籍が出版されている。

（３）貧困問題と失業問題

1991年、モンゴルに市場経済が導入された。その急速な導入による負の影響として、貧困問題や失業問題が起こり、現在に至るまで解決されていない。

2006年8月26日、27日に日本福祉大学、モンゴル国教育大学、大阪外国語大学がチームを組んで、貧困世帯の調査（以下Ｂ調査とする）が行われた。8月25日に調査地区の見学を行った後、筆者もＢ調査に参加させていただいた。そしてモンゴル国教育大学の先生、調査地区の住人の方と共に障害者の方がいる８つの家庭を訪れ、聞き取り調査を行った。そこで、貧困の深刻な実態を肌身で感じた。電気が欲しい、道が整っていない、仕事がないことが一番の問題であり、住民会議の議題にもよく出る、子どもの学費が払えない、治療費が払えない、食費を削っているなどの証言を多くの人から聞いた。ゴミの山で暮らす人とも会った。

貧困とされる家庭が全て悲痛な状態なのではなく、前向きに、たくましく暮らしている人もいる。だが、病人や学校へ通う年齢の子どもが数人いる場合、生活は非常に厳しくなるようだ。やはり貧困は大きな社会問題である。市内や市場にはストリートチルドレンもよく見られる。

貧困から抜け出るために働こうと思っても、ある程度の収入の仕事に就くためには、年齢や、専門の壁がある。そのため、なかなか仕事が見つからない。近年では韓国、アメリカ、日本など外国への出稼ぎが増えている。

（４）医療問題

留学している頃から、モンゴルの医療は大きな問題があるのではないかと感じていた。今回Ｂ調査で聞き取りをした障害者の女性は「高額の注射や薬を自分で外から買ってこなければならない[10]。」と証言した。また、モンゴルで日本語教師をしている友人が、軽い腹痛を盲腸と誤診され、手術されそうになった話を聞いたこともある。

そこでさらに詳しいモンゴルの医療事情について情報を得るため、理学療法士の道久恵氏にお話を伺った。彼女は、2005年6月から2006年6月まで、モンゴル国立障害者リハビリテーションセンター（以下：リハセンターとする）で、リハビリテーションの技術を伝えるボランティア活動を行ってきた。2007年3月からは青年海外協力隊員として、２年間リハセンターへ派遣されることが決まっている。

道久氏は2006年8月26日に、1年間行ったボランティア活動の結果とモンゴルの医療事情について、国際医療協力セミナーぼちぼちの会で報告を行った。この節では彼女が口頭で行った報告の原稿を引用し、ウランバートルの医療事情と問題

点についてまとめる。下記枠内が、道久氏の報告である。

問題①　医療設備の不足

ウランバートル市には、国立の病院機関としては、リハセンター内の病院部門以外にも、第一病院、第二病院、旧外傷病院、新外傷病院、小児病院、軍人病院などがあります。そのほか、外国資本の私立病院も増えてきています。しかし、私立病院は診療費が高いため、一般の人などは入院ができないことが多いです。レントゲンや検査はコストがかかるといった理由から、整形外科の手術後もレントゲン撮影が行われません。

問題②　医者と医療技術の水準が低い

患者中心医療やチーム医療といった考えはまったくない。そのため、医師の指示ミス、診断ミス、手術ミスも見過ごされている。インフォームドコンセントが行われておらず、患者自身も、自分が何の疾患で、どういった治療を受けているのか、どんな手術が行われ、結果・経過はどうであるなどの情報をまったく知りません。

レントゲン診断ができない。左右をまちがえるならまだしも、上下を間違えて見る医師もいます。外国から新しく手術方法が紹介されれば、見よう見まねで手術がなされる。もちろん失敗しても患者に告げられることはありません。モンゴルで特に多い、切断手術についても、時間の短縮だけが重要視されており、断端の骨の形成や筋の縫合などは行われません。また、脊髄腔内への空気の注入。これは第二次世界大戦中、戦場で薬剤がまったく無くなったときにプラセボ効果を狙って行われていたそうですが、これが実際に病院で治療の一環として行われています。

問題③　医療従事者の給料が低い

特に国立（外科医など手術を行う医師や私立は多少マシ）。国立リハセンターの医師で一ヶ月の給料は60ドル程度です。一般企業では100から150ドル程度です。給与が低いため、海外で学んだレベルの高い医師はモンゴル国内に残らず、海外に定住してしまうか、通訳など違う職種を選んでしまう。通訳であれば、一日30ドル程度の給与がもらえるところもあるそうです。医師という仕事は好きだけれど、食べて行けないと、仕方なく違う職業を選ぶ医師もたくさんいます。

リハセンターで、道久氏は多くの患者と関わってきた。その患者というのは、よその病院で不完全な処置をされた末に来る方が大半だったそうだ。彼らの証言や他病院との交流活動によって、以上のような実態が分かったそうである。

私立で比較的設備の整った病院もあるが、治療費が高い。モンゴルでは、医療施設の不足、医者と医療技術の水準の低さが大きな問題だ。だが、根底にあるのは、問題③であると道久さんは指摘する。給料が低く待遇が悪いため、意欲のある良い医者が育たない。そのため問題②が悪化するという悪循環に陥っているようだ。

このような病院事情、あるいはお金がないという理由から、病気のときは、寺を訪れてお経を唱えてもらう、あるいは民間療法に頼るという人もいる。B調査を行った際にも、民間療法のマッサージ師に頼るというケースがあった。シャーマンを訪れる相談者も、病気の相談が非常に多い。背景には、このような医療事情があることを押さえておきたい。

（5）宗教事情

現在のモンゴルで、大多数の人が信仰している宗教は、やはりチベット仏教である。社会主義時

代が終わり信教の自由が認められて以来、各地で寺が復興を遂げた。実際にガンダン寺やダシチョイリン・ヒードなどの寺を訪れると、老若男女を問わず多くの人が参拝に訪れている。

友人のモンゴル人女性（19歳）に聞くと、試験の前などにお経を唱えてもらうことがあるそうだ。特に珍しいことではない、と話していた。病気の時、心配事を抱えている時に、お経を唱えてもらうと良くなると信じる人もいる。また、占星術を専門とするラマ僧も存在し、寺の内部に占い相談のスペースを設けてあるのを見た。友人の牧民男性（26歳）は、ラマ僧に結婚の時期や、相性を占ってもらったことがあるそうだ。薬草の知識を持ったラマ僧がいて、薬を処方することもある。

その他の宗教については、韓国系のキリスト教が広まってきているようだ。筆者が留学中に通っていた学校にも、韓国人のキリスト教牧師が数人いた。布教とともに鍼などの技術を無料で教える活動をしているそうだ。Ｂ調査を行った地域の一画にも、教会があった。

また、2006年8月下旬に、ＵＢパレスという大きなコンサート会場で、英語を話す白人男性の牧師による講演会が開催された。7月28日に筆者がモンゴルへ着いた時は、街中にポスターが貼られ、空港でもチラシを配布するなど、宣伝にかなり力を入れている様子であった。講演会の中継をテレビで見たが、広い会場いっぱいに人が入り、キリストの奇跡によって車椅子の人が歩き出すという様子が劇的に放送されていた。どの流派のキリスト教団体なのか、資金源、モンゴルへ布教に来た目的などは不明である。

ラマ僧やキリスト教の牧師に比べ、シャーマンはまだまだ一般的でない。ＴＶで自然祭祀儀礼を行っているシャーマンの様子や、シャーマン風ダンスの様子が放映され、シャーマンに関する本が出版されるなど、以前よりは理解が進んできているようだがそれも一部での話だ。

Ｂ調査で訪れた8家庭と、その地域で暮らす人々数名に対し、信仰する宗教について質問をした。だが、シャーマンを訪れたことのある人は0人であり、シャーマンを訪れようと思うかという質問に対して、はいと答えた人もいなかった。その理由は主に、シャーマンは恐ろしいから、シャーマンに知り合いはいないし、胡散臭い気がするから、チベット仏教を信仰しているから、宗教を信じていないから、などであった。

また、ホームステイ先の家族、友人や、知り合いになった人たちにシャーマンの印象を尋ねると、たいていの人は良い印象を持っていなかった。呪いをかけられるかもしれない、というのである。ホームステイ先の21歳の女性は、筆者がシャーマンを調査しようとしていることを知ると、「シャーマンにうかつに関わっちゃだめよ。悪いシャーマンだと呪いをかけられるかもしれない。怖いわ。」と言った。筆者と同年代の彼女が、だまされることではなく、呪いをかけられることを心配したのが意外だった。

では、実際のシャーマンはどのような人たちなのか。調査結果を第３章で述べる。

資料１　シャーマンの衣装、道具、占いについて

＜衣装＞

悪い影響から身を守る鎧という意味がある。また一番下に着用する衣装の左脇の下が破れている場合がある。なぜなら、衣装の破れ目からオンゴッドが入り、シャーマンの身体に憑依すると考えられているからだ。ブリヤートのシャーマンの場合、その上にマントのようなものを身につける。更に強力な守護が必要な場合は、その上から毛皮の衣装を身につける。写真１は、ブリヤートのシャーマン、ガルバドラフ・ザイランが全ての衣装、帽子を身につけた時の写真である。

写真２は、オリヤンハイのシャーマン、バルジンナム・ザイランの自宅を訪ねた時の写真だ。複数の太鼓と衣装があった。色とりどりのリボン状の布が衣装に付けられている。

またダルハドのシャーマン、エンフバヤル・オッドガンの場合は、衣装に81体の蛇の人形が付いていた。また、背中にゼウセクと呼ばれる鉄飾りがいくつも付いていた。金属製の飾り、蛇の人形、リボン状の布はシャーマンの衣装によく見られる飾りである。

＜帽子＞

帽子にも身を守る意味がある。また、下部には目隠しがついている。これはシャーマンがトランス状態に入りやすくするためのものだと思われる。デザインは、目や顔が刺繍されているものが多い。ブリヤート以外の場合は、上の部分に鳥の羽が飾られている。ブリヤートの場合は、鹿の角をかたどった金属製の帽子である。横の部分に黒い蛇の人形が４体付いている場合もある。

また、布でできた帽子は２種類あり、黒い帽子は黒い側のオンゴットを呼び出すときに、青い帽

写真１

2005年６月27日
フブスグル湖のほとりにて
撮影：ゾーニーメデー社
新聞記者トンガラク氏

写真２

2006年９月22日
オリヤンハイのシャーマン
バルジンナム・ザイラン
撮影：藤井

子は白い側のシャーマンを呼び出すときにかぶる。鹿の角をかたどった鉄製の帽子は、より強い悪影響から身を守る際に、布の帽子の上からかぶる。

＜太鼓＞

太鼓はシャーマンの乗り物と言われている。脱魂型のシャーマンの場合、その音色は自らの魂が霊界へ向かう時の乗り物となる。憑依型の場合、その音色に乗ってオンゴッドがやってくる。つまり太鼓はオンゴットの乗り物になるようだ。

ハルハ、ダルハド、ツァータン（トゥヴァ）、オリヤンハイなどほとんどの場合は厚みのある太鼓を使っている。だが、ブリヤートの場合は厚みのない太鼓を用いていた。ダルハドのシャーマン、エンフバヤル・オッドガンの太鼓の取っ手には老人（オンゴッド）の顔が彫られている。また、オリヤンハイのシャーマン、バルジンナム・ザイランの場合、太鼓には人の顔や木、動物などが描かれていた。太鼓の絵柄やデザインも個人差が大きい。

＜鏡＞

衣装以外では、最も強力なお守りである。特に新米のシャーマンは鏡を肌身離さず身につけるように指示される。鏡の曇り具合で危険を察知するシャーマンもいる。

写真３は儀式を行う直前のガルバドラフ・ザイランの姿である。自宅前で撮影した。胸元とその下に銀色と金色の鏡が２つ見られる。

＜その他＞

数珠、鈴、経文などブリヤートのシャーマンにはラマ教の法具が取り入れられている。オンゴッドを呼び出す歌の歌詞にも、ラマ教のマントラ（真言）があった。その他、杖、鞭もブリヤート特有の道具だ。ガンガとは草原に分布する紫色の小さな花をつける草をつみ、乾燥させたものを指す。その煙には浄化作用があると考えられ、儀式の時に焚かれる。アルツと呼ばれる香を焚く場合もある。

写真３

2005年11月10日撮影：藤井

＜占い＞

たいていのシャーマンは占いを行う。毎回大掛かりな儀式を行うのは大変だ。そのため儀式を行う前や、軽いアドバイスをする時に占いを行う。また口琴を弾きながらインスピレーションを得るシャーマンもいる。占いの道具には数珠、コイン、シャガイ（羊のくるぶしの骨）、トランプ、石、羊の肩甲骨など様々な種類がある。

＜参考文献リスト＞

日本語文献

・島村一平（2000）、「平原に聴く、シャーマニズムの息吹」『季刊　民族学』93号、国立民族学博物館友の会

・鯨岡峻（2005）、『エピソード記述入門―実践と質的研究のために』、東京大学出版会

・佐藤正衛（2004）、『北アジアの文化の力　天と地を結ぶ偉大な世界観のもとで』、新評論

・ウヴェ・フリック（2002）、『質的研究入門―＜人間の科学＞のための方法論』、春秋社

・ミハーイ・ホッパール（1998）、『シャーマニズム

の世界』、青土社
・ピアーズ・ヴィテブスキー（1996）、『シャーマンの世界』、創元社
・ロジャー・ウォルシュ（1996）、『シャーマニズムの精神人類学』、春秋社
・井上順孝・編（1994）、『現代日本の宗教社会学』、世界思想社
・佐々木宏幹（1980）、『シャーマニズム～エクスタシーと憑霊の文化～』、中央公論社
・ウノ・ハルヴァ（1989）、『シャマニズム　アルタイ系諸民族の世界観』、三省堂
・桜井徳太郎・編（1978）、『シャーマニズムの世界』、春秋社
・M・エリアーデ（1974）、『シャーマニズム』、冬樹社
・ミハイロフスキー／バンザロフ著　白鳥庫吉／高橋勝之訳（1971）、『シャマニズムの研究』、新時代社

モンゴル語文献
・Д.Бямбадорж(2006),"Мөнх тэнгэрийн шашин бөө мөргөл",Улаанбаатар
・Д.Бямбадорж(2005),"Бурхан халдун хайрхан тэнгэрийн тахилга, бөөгийн ёс",Улаанбаатар
・Ш.Сүхбат(2005),"Монгол нүүдэлчин ардын шашин шүтлэгийн зан үйл",Улаанбаатар
・Ц.Нүүөбэл.Б.Төмөр(2004)."Тэнгэрийн элч",Улаанбаатар
・А.Оюунтуигалаг(2004),"Монгол улсийн буриадууд",Улаанбаатар
・Ш.Сүхбат(2003),"Бөө",Улаанбаатар
・С.Бадамхатан(1692),"Хөвсгөлийн цаатан ардын аж байдалийн тойм",Улаанбаатар
・Ч.Далай(1959),"Монголын бөөгийн мөргөлийн товч түүх",Улаанбаатар
・"Босоо Хөх нөмрөгиөн"(2006 №1,№2)

ウェブサイト
・質的研究の部屋 <http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/4688/index.html>
・質的研究法講座 <http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~ysekigch/qual/qualassess.html>
・平成12年度 経済協力評価報告書 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hyouka/kunibetu/gai/h12gai/index.html>
・モンゴル国統計局 <http://www.nso.mn/>
・Азийн бөөгийн "Тив дэлхийн холбоо"<http://www.owc.org.mn/tivdelhii/golomt/index.htm>
・Roaring Hooves-Mongolia <http://www.roaringhooves.com/>

註

1) 調査を行い、その調査研究から理論を発見し、理論検証のための調査を行う、という循環的なプロセスをとる研究方法。ウヴェ・フリック（2002）、『質的研究入門―＜人間の科学＞のための方法論』、p.p52～58参照。
2) 桜井徳太郎・編（1978）、『シャーマニズムの世界』、春秋社　pp.2-38にこの論文が掲載されている。
3) ヨーラー・オッドガン（48歳）はダルハド族のシャーマンである。2005年8月17日、フブスグル県のオラーンオオルにある自宅で、お話を伺った。
4) 資料2、資料3、資料4参照。
5) Ш.Сүхбат(2003),"Бөө",Улаанбаатар p65 ダルハドのダルジド・オッドガンの証言。
6) シャーマンのセンター。多くのシャーマンが所属している。私は2005年6月にゴロムトセンターを訪れ、スフバット氏にお話を伺った。参考ウェブサイト Азийн бөөгийн "Тив дэлхийн холбоо" 参照。
7) 資料4参照。
8)「2000年度版 ODA 評価報告書　経済協力評価報告書　第1章2. モンゴル」参照。
9) National Statistical Office of Mongolia の "Mongolian statistical Years book" 2003 -2006年から引用。
10) 2006年8月26日　目と腎臓が悪い女性の証言。

（ふじい　まよ）